
銀の鷹

sanana

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の鷹

【Nコード】

N4208W

【作者名】

s a n a n a

【あらすじ】

図書館の絵に吸い込まれたら、そこは別世界でした。って、アリス状態の私。

そこには、伯父と、いることも初めて知った姉と兄がいた。わけのわからないまま7日後に世界の扉が開くまでこの世界に滞在することになった私に、可能であれば、と望まれたこと。

それは、「銀の鷹」を探すこと。

のんびりとこの世界を眺めながら、私はどんなものか誰も知らない「銀の鷹」を見つけることができるのか。

そして、「銀の鷹」っていったいなニ？

プロローグ

小さい頃に読んだ「不思議の国のアリス」。
白ウサギの後を追っていったそこは不思議の国。
でも、どちらかというと「鏡の国のアリス」の方が好きだったのだ。
自分の足で進むアリスが魅力的で…。
だいたい、なんで何もしていないのに「首をはねろ」といわれなければならぬのだ？

しかし、だいたい巻き込まれる運命と言うのは、理不尽なものだと、この年になってはじめて知った。

ありえないことだが。
悪かったわ、「不思議の国」のアリスさん、今までいろいろ言ってます。

でも、不思議の国に巻き込まれたアリスは、最後夢だったとわかるけれど、

私の巻き込まれているこの世界、果たして最後に夢だとわかるのかしら？

どう考えても夢にはしてもらえない気がするけれど…。

プロローグ（後書き）

ゆるーい異世界ファンタジーです。
ゆるゆるこへ。

「ずいぶんおとなしいようだが、起きてるのか？落ちるなよ？」
後ろから声がする。

乗馬を習っているので馬に乗る機会はあるが、あまり人と一緒に乗る機会はないような気がする。

しかも前に乗せられるって、どこのお姫様だ…。

「おかげさまでなんとか。ところであとどのくらいで着くのかしら？」

「そうだな、あと三十分、というところかな。」

見慣れない景色を見るとはなしに眺めながらぼんやり考え事をしていたせいか、

どのくらい揺られているのかわからなくなった。

「時間の考え方は一緒なの？」

「時間、分、秒、日、月。年の考え方は一緒だな。うるう年もあるぞ。」

ただし、一月が二十九日になる。二月はもともと三十一日まである。」

私の後ろできれいな葦毛の馬の手綱をさばく男は、そう答える。
いじわるかな、と思いつつ言ってみる。

「へえ……なるほどね。」

ところで、私は今、「一緒なの？」と聞いたわけで、そこまで語れると言うことは、

私の来たところがどういいうところなのかもすごく知っているってことよね。どうして？」

あ、沈黙した。

「・・・、それは私が答えることではない。」

「さつきからそればかりだなあ。」

「だから、ちゃんと説明ができる人のところへ連れて行ってやると言っているだろうが。」

俺にはそんな権限がないんだ。」

本当にさつきからそればかりだ。どんな権限があるんだ、ただの世間話に。

「権限がない割に、いろいろ答えちゃってる気がするけど、いいの？」

「もうお前、話すな、黙っている。」

あ、ひどいな、それ。ただのささやかな疑問じゃないの！

「何よ、それ。自分がさつきからぺらぺらしゃべってるのが悪いんでしょ？」

「お前なあ、突然見たこともない世界に落ちてきて、知らない人のところに

連れて行かれてるって言うのに、もうちょっと緊張したらどうなんだ？」

「知らないわよ、そんなの。」

十二分に緊張してるわよ、私。

そんなにわからないかなあ。

しかも、最初は丁寧語だったのに、どんどん口調が適当になってるわ、あはは。

扉 - 01 (後書き)

ちよつと短めですみません。
切れ目が難しいな。。。

何かを話していないと、不安でたまらないのだ。

この人は悪い人ではない、それどころかびっくりするくらい懐かしい気持ちがしている。

だからこそ、見ず知らずの人の馬に一緒に乗って、どこだか知らないところに向かっているのだ。

私にだって人並みに緊張感はあるのだ。

そもそも、いったいどうしてこんなことになったんだ、そう考えごとしたって

全くおかしくないはずだ。

それを、起きてるか、なんて、失礼な！

ついさっきまで、私は図書館にいた。

近所の、小さい頃から通っている大好きな場所。

借りた本を持って、なんとなく二階の閲覧室で読もうと階段を上っ

ていった私は、

ふと途中にある絵に目が行った。

それは森と湖の絵で、かなり大きなものだ。

私には絵のそういう知識はないので、何号、とかはわからないけれど、

よく見たいのであれば、くっ、と、見上げるような大きさ。

階段の部分は吹抜けになっており、踊り場になっているところに、

それは飾られている。

きれいだな、と通りすがりには見えていても、いつも足を止めることなどないのに、

なぜ今日に限ってこんなに気になるのだろうか。

それはすぐにわかった。

湖のほとりに、灯りが一つ灯っていたのだ。

「なにこれ。ランタン？でも、どうして？」

その灯りは、どうやらランタンのようだった。誰かがそつと置いていったように。

しかも、その灯りは、ぼんやりと揺れていた。

まるで、本当の灯りのようにまさに今、その絵の中でゆらゆらと揺れているのだ。

この図書館に長年通い、何度も何度も二階へ上っている私だが、今まで湖のほとりに灯りが灯っていたことなど、見たことはない。例え通りすがりに見ていただけ、だとしても、今まで気がつかないわけではないくらい、その灯りは目にとまる。暖かく包まれるかのような。暗闇を長く歩いてきた旅人を迎えて癒すかのような、そんな灯り。

変化は突然だった。

ゆらゆら揺れている灯りから、何故か目が離せなくなった。

催眠術でろうそくの灯りを使うことがあるんだっけ？などと、くだらないことを思っていたら、

びっくりするくらい眠くなってきた。

ありえない、何なのだ、この感覚は。

こんなところで眠ったら危ないじゃない、踊り場だけど一応ここは階段だし、

そもそもこんなところで寝てたら次に上ってきた人がびっくりしちやうわよ、とか、

一生懸命考えて眠気を払しょくしようとする。

それなのに全く眠気は消えない。

それどころか、どんどんひどくなるばかりだ。

とうとう眠さに耐えられなくなって、私は持っていた本を落とし、壁に向かって倒れこんだ。

正確に言えば、壁、というより、壁にかかった絵に倒れこんだ。
あーあ、本を落としちゃったよ、拾わなくちゃ、とぼんやり思った。

そもそも普通ならば、ここで私は衝撃を受けて、目が覚めるはず
だった。

壁に、いや絵に思いつきりぶつかったのだ。

おでこをさすりながら、必死で絵の心配をする。

高い絵だったらどうしよう、傷とか血とか汚れとかついていたらど
うしよう。

しかも、結構広い踊り場とはいえ、一応階段だから、ちょっとよる
めいて階段から落ちいてたら

危なかった、などとひやひやしなから、

そして恥ずかしさで辺りをきよろきよろ見回す、はずだった。

そう、はずだった。

ところが実際は。私は絵の中に、すっと吸い込まれた、らしい。

痛みも質感も伴わなかったが、何故か自分がすんなり絵を、壁を通
り抜けたことがわかった。

そして目の前に森と湖が広がったと思ったら、一瞬で石造りの広い
広い建物の中にいた。

扉 - 02 (後書き)

階段の踊り場、って、やっぱり誰か踊ってたのかなあ？と思っていました、

階段の先で実際に踊っていたのが「踊り場」に通じた、というのと、貴婦人のドレスがこの場所を歩くとき踊っているように見えた、とか、説はあるけど未詳なんですね！。

「どこよ、ここ。」
一番近いのは、テレビで見たギリシャの神殿の遺跡ではないかと思う。

高い高い天井と、どことなく荘厳な雰囲気。広いが何の装飾も家具もない。

あるのは四隅にそびえるシンプルな形の柱と、それに備え付けられ灯された灯りだけ。

森と湖の景色に吸い込まれた、と思ったのに、あまりのそっけない景色に呆然とする。

とはいえ、ランタンの灯りが目立つような夜、もしくは薄暗い森にいきなり落とされたとしても

それはそれで困る。

屋根があるだけましなのだろうか、と、つまらないことを考えて、しばらく立ち尽くしていた。

と、突然、何かの気配がした。音ではなく、気配。

そんなものに敏感なような人生でもないし、どちらかどいとうとぼんやりしているはずの私が、

なぜか「気配」と感じるってどういうこと？と、後々の今になって思っているところだ。

でも、確かにそのときは、何かの気配を感じたのだ。しかも、突然。びっくりして振り向くと、そこには驚くほどカッコいい男が立っていた。

いや、正確に言うとかッコいいだけではない、ずっと前にどこかで会った人のような気がする。

ひどく懐かしい。

しかし、私にはこんな真っ黒いきれいな長髪で、しかも蒼い眼の知

り合いはいない。

腰くらいまである髪は、いわゆる「烏の濡れ羽色」、つやつや光って美しい。

私はどちらかというとかせつ毛なので、うらやましい限りだ。きつと、パーマとかかかりにくいんだろうな。

そして快晴の空の色のような、深く明るく澄んだ蒼い目。

サファイアみたい、ブルートパーズみたい、いや、なんか、ああいう飴あつたよな、

、と、どうでもいいことを一瞬のうちに考える。

顔立ちは鼻が高く、少しだけゴツイ。

結んだ口がへの字だが、笑ったらもつといい顔なんだろう、と思える。

私が驚きを通り越し、バカみたいにその人を凝視して、どうでもいいことを考えていると、

「怪我は？」と、突然その人が言った。

うっとりするような少しだけ低めのいい声で。

いやー、カッコいい男って、声までカッコいいのかしら？！

なんか歌ってくれないかなーって、いやいや、あれ、今って話しかけるの？

誰に？

いや、私しかいないのか。

「はい、大丈夫です。かなり、びっくりしていますけど。」

普通に受け答えた私を、自分ながらほめたいと思った。

おお、よく答えたな、私！

この「突然現れた驚き」と「いきなりカッコいい男が現れた驚き」と「しかもいい声」と

冷静でいられないはずのこの状況で、よく頑張ってるぞ、私！

……相当動揺しているようである。

「ここは、先ほどまで君がいたところとは違う場所だ。だが、それを説明する権利は私にはない。」

もしよければ、それを説明してくれる人のところへ連れて行くが、どうする?」

いきなり違う場所だって、どうするって、意味分らないんですけど。

しかも、説明する権利がないって、何なの、それ。

その上、どこかに連れていく?

初心者に、あんまり展開が早すぎるんじゃないの?

「あの、ここってどこなんですか?」

だから、私がそう聞いたのは、当然だと思う。

だって、初心者だもん!・・・何の?と、心の中でツッコミを入れつつ。

「私には説明する権利がない。」

ただ言えることは、ここは先ほどまで君がいたところではない、ということだけだ。」

なんで私がいたところじゃないって、知っているのよ。

ええい、この人、カッコいいと言ってる場合じゃないな。

埒があかないな。

「あなたは、誰?」

「カイだ。」

「名前だけ聞きたかったわけじゃないんだけど。」

「そんなことより、このままここにいても、何も変わらないが、どうする?」

やっぱり埒があかない。。。

何も変わらないって、どういう意味よ。

「考える時間が必要なら待つが、私もそんなに暇ではない。」

一緒に来るか、来ないか、早めに決めてくれ。

ちなみにここは、待っていても他の人間は七日後まで多分来ない

だろうな。

まして夜が近い。

夜中ずっとここにいても、危険はないと思うが、保障はしかねる。一番いいのは、さっさと一緒に来ることを決めてもらえることだが、

まあ、無理強いするつもりはないから。」

はい、また出ました。

だから、初心者には急展開なんだってば！

無理強いするつもりはないって、危険はないと思うが保証できない
人気のない場所に

置き去りか一緒に行くか、って。

そのどこに選択権が与えられているのよ。

そんなのないのと一緒じゃないのよ！

「どうする？」

重ねて聞く男をちよつとだけ睨みつけて、目をつむる。

「……………、ちよつと待って。」

落ち着け、落ち着け、私。

大きく息を吸い込む。

こういうときは、深呼吸、深呼吸。

この何もないところにいても、飲み物も食べ物もないし、石の床に
直接寝たことは未だかつてない。

この人の言っていることが本当だとすると、あと一週間はこの何も
ないところで過ごさないといけないかもしれない。

しかも次に来た人がいい人なのかわからないし、ここからこの人
と一緒に行かないで人のいるところに行けるかどうかも分からない。
少なくともこの人は一応私がここに「来る」ことを知っていたよう
だし、私が「ことは別の世界から来た」ってことも知っている。

この人についていけば、私がここになぜいるのか、その事情がわか
るんだろうか。

いや、この人に説明する「権利」はないようだけど、説明できる人がいるようだし、親切にも連れて行ってくれると言っている。親切？親切なの？

というか、この状況、まるでよくわからない。だけど、目の前に現れたこの人以外、今のところ何の手がかりもない。

しかも、どうやら手足が2本ずつで口でしゃべる、しかも言葉が通じている感じの人類だ。

たこみたいな火星人や、何の部位がよくわからない形をした宇宙人でもない。

ちやんと、人類。多分。

・・・何より、この人は悪い人のような気がしない。

気のせいかもしれないけれど、他の判断要素がない以上、ここでは自分の直感くらいしか信じられるものもない。

「一つだけ聞いてもいい？」

でも、決めるのに、あと一押し！

「答えられることはほとんどないが。」

その権利つてのが気になるんだけどな。

なんでそんな権利ない人が来ちゃってるのよ。

権利ある人が来てほしかったわ。

なんて思っても仕方ないから。

ここは、直感に任せて。

「あなた、悪い人？」

「・・・」

一応聞いてみようかな、と思ったんだけど。

その人は、少し驚いた顔をしてじっと私の顔を見た。

次に今までの中で最高に無表情になって答えた。

「・・・多分、悪いやつではないと思う。君に危害を加えるつもり

もないしな。

しかし、普通悪いやつが自分で『悪人だ』と言うのか？」

あ、呆れてたのね。

はいはい、ワタクシがわるうございました。

確かにその通りでした。

ちよつと聞いてみたかったですよ。

すみません、アホの子みたいに見るのやめてください。

何です、その無表情。。。

自分にひたすらツツコミを入れつつ、少し恥ずかしくなっていたら、なんとその人は、信じられない無表情から一転、なんとうつすらほほ笑んだのだ。

「まあ、どんな風に見えても、信用してもらおうしかない。なんの証拠も保障も持っていない。

ただ、君をちゃんと送り届けることは約束する。それが、私の役目だから。」

その表情も反則です！

やっぱり笑ったらかわいいじゃないか。。。

「役目」っていうのも気になるけど。

わからないことばかりだけれど。

ここにいた方がいいってことは少なくともなさそうだし。

ええい、女は度胸だ。

「・・・わかった、あなたを信じます。その、説明してくれる人のところへ連れて行って。」

そう言うと、その人はまた、びっくりするくらい優しい顔でにっこり笑ったのだ。

「了解した。では、こちらへ。」

扉 - 03 (後書き)

やっと他の人登場！

その部屋から出ると、細い廊下が続いた。

天井は高く、廊下は部屋と同じで飾りもほとんどない。

途中に扉がいくつかあったが、そこには見向きもせず、まっすぐ廊下を進んでいく。

しばらく歩くとひときわ大きな扉があった。

ドアには何か、大きな樹のレリーフがあった。

カイはドアに向かってそつと手をかざし何かをつぶやく。

すると、扉は静かに開いた。まるで自動ドアだ。

「ここにも自動ドアはあるの？」

「自動ドアだと？そんなものはない。今は、私の呪文で開いただけだ。」

じゅ、呪文……。

そんなもので扉が開く世界ですか。

……開けゴマかよ……。

しかもこの人、自動ドアって言って通じてるよ。

他にも絶対いろいろ知ってるはずなのに、本当に私に話す「権利」って何よ、いったい。

扉の先は森の中だった。

振りかえると森の中にいきなり大きな、砂色の岩山。

私たちが出てきた扉は、その岩山のなかに埋め込まれているように存在している。

どこかの神殿っぽいつて思っていたけど、岩山を掘って作られたものだったのかしら。

外国の修道院にそういうのあったような気がするけれど。

って、いずれにしる私のイメージでは、ああいう建物って宗教関係なのね。。。

あ、もしくはどこかのテーマパーク？

お昼食べ損ねたのかな…お腹すいたな…。

そう思った瞬間、大きな音でお腹が鳴った。

「っ……っ！」

さ、さすがに、恥ずかしい！！

「ああ、何か食べるか。」

カイはそういうと、私に近くの岩に腰かけるように言い、近くから小枝を少しだけ集め、右手をかざす。

おお、すごい、火がついた！魔法だ！

魔法って便利！チャッカマンとかなくてもいいんだ！

…口に出したらため息をつかれそうなので、黙っていることにした。それに、チャッカマンのこともきつと知ってるんだろっなあ、と思うと、面倒で。

まず、お腹を満たしてから。それからだ。

カイは持っていたカバンからポットのようなものを取り出すと、何かの葉を入れて火の上に置く。

それからパンとハムとチーズのかたまり、のようなものを取り出す。パンは天然酵母の少し硬めのパン風で、薄切りにしたそれをさつと火であぶると、今度は懐から取り出したナイフでハムを適当に切つて載せる。

最後にチーズをとろけさせてハムの上に。

何そのおいしそうなものは！！！！

「口に合うかはわからないが。」

そう言って渡してくれる。

「いただきます……」

いやあ、期待を裏切らない味！

ハムは（一応、何のお肉かあまり考えないことにしようと思ってるが）、普通に食べやすい味。
塩気もちょうどいい。

チーズは場合によってはもっと香りが強いかと思っていたが、スモークチーズみたいにちよつといぶされた感じがする、おいしいものだった。

「おいしいー！」

多分、ちびっこみたいな満面の笑顔だったんだと思う。

「そうか」

カイはちよつと苦笑、って感じで、カップにお茶を入れてくれる。

カップは軽くて、陶器っぽいけど割れそうにない感じ。

そしてお茶は、甘い香りの紅茶のようなものだった。

「このお茶もおいしいね。」

「それはエルシュという葉のお茶だ。」

「エルシュっていうんだー、へー。」

そういつつカイも自分の分の分を作って食べている。

…食べるの早い…。

「もうひとつ食べるか？」

「いえ、もうお腹いっぱいです」

「そうか。」

そんなに大きくないし、お腹すいちゃうかも、と思っていたが、なかなかずしんとお腹にきた。

当分食べ物に要りません。。。

食べてる間に特に会話はなし。黙々と食べ終わった。

「馬には乗れるか？」

「乗れません。」

「そうか。それならもう一頭連れてきたらよかったな。あいにく私の乗ってきた一頭だけなので、まあ我慢してくれ。」

お昼（私にとっての）ご飯も済み、ようやくひとごち着いた、ということ、移動開始。

馬が一頭、ということ、カイの前に乗って、馬に揺られている。それにしても、カイは私の暮らす世界のことをよく知っているように思える。

どうして知っているんだろう？

そのくせ何も説明できないって、どういふことなんだろう？

「まあ、いろいろ疑問に思っているだろうことは想像に難くない、が、もう少し我慢してくれ。」

森の中をゆつくりと進む。

少しずつ薄暗くなっており、さっきカイが「夜が近い」といっていたことを思い出す。

まずは、その「説明してくれる人」に会ってからだ、そう思っていると、ふいに目の前が開けた。

「見えたぞ、あの大きな建物が見えるか？あそこに向かう。」

目の前には大きな建物を中心として、放射上に広がる街がある。

「きれい・・・」

今にも落ちそうな夕焼けに照らされた街は、やけにきれいで、そして、なんだか懐かしい気がする。

どうしてカイと言い、この街と言い、こんなに懐かしいような気がするのだろう。

多分、この懐かしさが、緊張しつつ、不安になりつつもどこかでは安心して理由だろう。

…別にカイがカッコいいからついてきただけじゃないのよ、私。

扉 04 (後書き)

第一章おわりです。

城・01(前書き)

第2章はじまりはじまりー

たどり着いた建物は、「城」と呼ばれていた。

真っ白な石造りの大きな建物で、三階建て、というところだろうか。とにかく大きい。

わー、大きいなー、すごいなー。

端から端まで移動するのに、動く歩道とか欲しくなりそうなくらい広いなあ。

ここ、何だろう。「城」って言ってたけど。

…ちよつと待つてよ、お城？

まだ観光とかしなくていいから、まずはその説明してくれる人に会わせてほしいんだけど…。

そう思っていた私に向かつて、馬を止めながらカイが言った。

「さて、と、ようやく着いた。」

「え？」

カイさーん、だってここ、お城なんでしょう？

お城って言うと王様とか女王様とか住んでるようなイメージなんだけど。

そんなところに何の関係が…、って、まさかこんなところに、私のことを説明してくれる人がいるんじゃないでしょうね？

あ、もしかしてお城の中に何かこう、市民相談窓口があるとか。

で、その人からお城の中にも説明を受けるのが決まり、とか？

こう、黒い腕抜きしたようなおじさんが出てきて、もしかもしゃ説明してくれたりするのかな？

だったらありかな。

また呆然と建物とカイを交互に見上げつつも頭の中ではぐるぐる回っていた疑問を、仕方なくとうとう口にしようとしたとき、誰かが

やってきた。

「ああ、カイ。ご苦勞様。彼女が？」
その人は、カイに尋ねた。

誰だろう、と思つて見ると！！わー、また美形が！！！！
まっすぐに綺麗な長い赤毛を後ろで束ねて、すっきりした形のクリ
ム色のドレスがとても似合っている美人だ。

カイと並ぶと、美男美女で、目の保養

「ああ、絹花だ。絹花、こいつはリセ。この後は、こいつに連れて
行ってもらつてくれ。」

私も着替えてすぐ後から行くから。」

「え？カイが連れて行つてくれるんじゃないの？」

おいおい、話が違つじやない、と、驚いて聞き返す。

一応カイは信用することにしたけど、他のことを信じていいのかは
わからない。

何も分からないところで、いきなりまた知らない人と二人になるの？
すると、赤毛美人、リセさんが鮮やかな笑顔で答える。

「ああ、絹花。カイはね、この格好ではちよつとこの城の中に入れ
ないんでね。」

着替えてすぐにくるから、私を信用して一緒に来てもらえないか
な。

大丈夫、怖いこともないし、危害も加えたりしない。ちゃんと陛
下のところにお連れするから。」

…これまたかなり強力な笑顔だ。

しかも女性なのにカッコいいって言葉が似合う感じ。
女子からラブレターとかチョコとかもらいまくりそうだわー！。

…つと、今、なんかすごいこと言わなかった？

「へ、今、陛下つておっしゃいました？」

陛下つて、陛下つて、私の知ってる使い方と違つんだよね、きつと。

『ヘイカ』つていう役職とか係があるんだよね。

そんな私のなけなしの想像力は、すぐに粉々にされる。

「カイ、言っただけだったのか？」

「これから女王陛下が君にお会いになるんだけど。」

「じよ、女王陛下下って言ったー!!!」

「カイ!!! わ、私に説明してくれる人って、まさか。」

驚いてカイを見る。そりゃあそつだ。

黒い腕抜きしたもじゃつとしたおじさんはどこ行っちゃったのよー

!!!

カイは私の驚きなど全く気にせず答える。

「…言っただけだったか？」

「そう、これからお会いするのは女王陛下だが。」

…聞いてませんか。つらつと言つたのやめてくださいよ。

ほんとに聞いてませんよ、私。

いきなり見ず知らずの世界にきて、たどり着いたところがお城で、

更にそのお城でいきなり女王陛下にお目にかかる私って、いったい

なんなのかしら。

すっかり頭が痛くなってきた。

ほんとに聞いてないよ、カイ。いきなりひどくない？

そう思つてうらみがましい目で隣のカイを見つめてみるが、カイは

こちらを気にせず辺りをきよるきよると見回しはじめた。

そんなひどい格好だとは思わないけど、そのカイが着替えないとお

城に入られないって、私は？

「うーん、誰か来ると面倒だな。」

絹花、私はもう行くが、私を信用しろ。リセのことも保障する。

必ずすぐに女王陛下のところに向かうから。

絶対約束する、大丈夫だから、先に行つててくれ。」

カイがじつとわたしを見つめて言う。

カイにそう言われたら、とりあえずうなずくしか今の私にはできない。

「…うん、わかった。リセさん、よろしくお願いします。」

心細く感じていた私に、カイがにっこり笑って信用しろ、と言う。そもそもここまでも、なんとなく、という直感でカイに着いてきたまでだ。

ここから先も直感でいくしかないだろう、多分。

そういう意味では、リセさんは信用できそうな感じがする。

うん、きっと大丈夫だ。信じるものは救われるはず。・・・多分だけ。

私は覚悟を決めて、軽く手をあげて風のように去っていくカイの後姿を見送った。

どこに行くんだろう、カイ。

リセさんがそつと私の背中を手でうがなすようにして言う。

「さあ、私たちも行こう。」

女王陛下が首を長くして、君のことを待っておられる。」

「は？私を待っている、んですか？」

「もう、全く意味がわからないことばかりだ。」

私を待っている、って、だって偶然こんなところに迷い込んだだけなのに、待っているって、私があることを知っていたのかしら？

カイが知っていたってことは、女王陛下も知っているってことなの？不思議に思っただけ返すと、リセさんはいたずらっ子がいたずらをお成功させたような満面の笑みで答えた。

「そう、もうずっとね、君の事を待っていたんだよ。」

ずっと？それはどういう意味？

尋ねたかったけれど、リセさんは、さあ行こう、と歩き出してしまった。

女性にしては歩くのが早い。

大急ぎで後を追いかけた。

ここまでの道のりのことを少し話しながら、謁見の間に案内され

る。

女王陛下に謁見するその広間は、想像以上に大きいものだった。体育館並みで、高い高い天井には、どうやら草原や空や森やきれいな景色が描かれているようだった。壁は真っ白で、ほんのり明るく光っているようにも見える。

「本当は君には関係はないのだけど、一応ここでの流儀だから従ってもらえる？」

リセさんはそう言うと、拝謁の際の礼の仕方なんかを教えてくれた。実際にやってみるよ、と言いながらの所作は、流れるようで、止まったところは絵のように美しい。

思わず見惚れるが、すぐにほら、やってみて、と言われてしまう。せっかくだからもう少し見ていたかったのに。

「そう、そのまま深く礼をして、陛下からお声がかかったら顔を上げて。」

でも膝は着いたままでね。どう？できそう？」

「うー、多分。難しくはないので。ただ、こんな感じでリセさんから見ても大丈夫ですか？」

そんなに難しくはないけど、きれいにできてはいないだろうなあ。すると、リセさんは軽く笑う。

「ははは。大丈夫、たいしたものだよ、初めてなのにな。」

とても美しい。」

それはさすがに言いすぎだろう。

でも、緊張してるの察してくれたのかな。

ちょっと安心した。なんとか拝謁できるかしら。

「さあ、そろそろ陛下がお出ましになるけれど、準備は大丈夫だね。」

「は、はい……、」

不安そうな私にくすくす笑いながらリセさんが言う。

「なに、とって食われるわけでないし、言葉も通じるよ、大丈夫。」

ちよつと変っているけれど、心から尊敬できる方だよ。
何事にも無理強いはなさらないだろうしね。」

リセさんがそう勇気付けてくれたタイミングで、遠くから鈴の音がした。

だんだん近くなっているようだ。

「陛下のお出ましを知らせる、先触れの鈴だよ。

それでは私も横の方に控えているからね。

何かあつたら必ず助けるから、安心して。

すぐにカイも来るだろうし。」

リセさんは、すつと横の方に行つてしまった。

広い広い大広間のご真ん中に取り残されたのは私だけ。

うー、ほんとに緊張するなあ。

あ、つと、お辞儀お辞儀。

顔は陛下に声をかけられるまで上げないつと。

先触れの鈴の音が本当に近くなってきた頃、いくつかの衣擦れの音と足音が聞こえた。

二人くらいここに入ってきて、ちょうどリセさんがいる方で止まつた、ように感じる。

カイかしら？

「陛下のお越しでございます。」

リセさんの凜としたかっこいい声がしたと思うと、いっそう近くで鈴が鳴った。

衣擦れの音とともに、何か大きな空気の塊が動いたような感じがする。

うまくいえないけれど、風が吹いてそこに留まったような。

「待たせましたね。皆も顔を上げて頂戴。」

やわらかい印象なのに、すごくはっきりした女の人の声が聞こえた。これが女王陛下の声。

なんだか母さんの声に似てる気がする、なんて言ったら失礼だね。

そつと顔を上げると、目の前は一瞬にして、とても大変なことになっていった。

美男美女の大売出し状態なのだ。

すごい、こんなの見たことない。

カイとリセさんだけでもかなり眼の保養なのに、こんなに並んじやあってどうしろっていうんだろう。

こんなに大量の美男美女がそろっているところに、居合わせたことではない気がする。

いや、うちのおとーさんもおかーさんも美男美女だったけどさ。。。

まず、何といっても女王陛下。

金色の巻き毛はふわふわで、白いドレスがよく似合う。

かわいらしいのににじみ出る威厳、というものが感じられ、ほんとうに女王陛下だ、って思う。

でも、思っていたよりずっとお若い！

もっとお年を召していらっしやるのかと思っていた。

淡い碧色の瞳が周囲を見渡し、にこりと私に微笑みかけた。

うわー、これ反則！！

女王様の威厳はあるけど、もうなんて言ったらいいか！！

天使とか女神様って感じの方が近い気がする！！見たことないけど！！

背筋を伸ばしてずっと座っていらっしやる場所は、なんかもう神々しい。。。

女王陛下の横には4人の美男美女が並んでいる。

まずリゼさん。

鈴を持った先触れの人たちにならずくと、彼女たちは去っていった。

(そもそもその先触れの人たちも、美人ばかりだったんだけど。)
そんなしぐさもきりっとしていて、本当に女子高だったら大モテだろう、なんてバカなことを考えてみる。

結構派手目の美人さんだから、ドレスのシンプルさがますます美しさを引き立てている。

なんかこう、太陽みたいな明るい感じの存在感がステキすぎ。

カイは、いつのまにかそこにいた。

背、高いなあ、やっぱり。190センチくらいあるんじゃないかなあ。

リセさんも175センチくらいありそうだけど、遥かにでかいもんなあ。

でも、髪を束ねて白い長いローブを着ているから、さっきとは別人のようだ。

髪形のせい？

あー、でもなんか、ちょっとまとっている雰囲気違うな。

発してる何かが違う。もっとオフィシャルな感じだからかな。

何やらちよつとストイックな感じなのに、変な色気があるような。

これまた女の子が、っていうより、おねーさま方が放っておかないだろう、と思わせる。

その隣に、これまた見たこともない美人が二人立っている。

といても、二人とも男の人だけ。

カイの隣の人は、栗毛色の髪を肩のあたりでそろえていて、薄いベージュの長いローブを着ている。

淡い緑の瞳でやわらかく微笑んでいる様子は、その辺の女の子なんかより、どう考えてもかわいい。

穏やかを絵にかいたような、陽だまりでお昼寝しているわんこみたいな。

しかも眼鏡男子！！

眼鏡外したら、かわいさ250パーセント増量！なんだろうなー！

そしてもう一人はストレートの銀髪を長く伸ばし、後ろで一つに束ねている。

少年上の。

つて、よくよくみたら・・・。

え！！！何で知りあいがここに！？

「おじさん！！どうしてここにいるのよっ！

しばらく見かけないと思っていただけ、おじさんもここに迷い込んでいたの？」

びっくりした。叔父だった。

さすがに見慣れない格好をして、雰囲気が全然違ったので一瞬迷ったが、見間違えるはずもない。

父の弟のリナス叔父さんだ。

ちなみに父はフィンランド人で、リンドルム、母は日本人で玲レイという。

実は私、ハーフなのだ。

しかも、母は日本人ながらフィンランドで育っており、あまり日本のことは詳しくない。

二人は、フィンランドで出会い、結婚し、父が昔から興味があった日本に来た。

父は今、大学教授なんてものをやっている。

父がくるくるの金髪なのに叔父はストレートの銀髪で、

昔は「叔父さんはすごいおじーさんなんだ」と思っていたが、もちろん地毛だった。

銀髪なんて見たことなかったから、驚いた。

何でも、お祖母さん、私の曾お祖母さんにあたる人が銀髪だったらしい。

と、そんな両親やら髪の色の話はどうでもよくって！！

「よう、絹花。よく気づいたなあ、こんな格好だから、わからないかと思っただのに。」

にっこり笑って叔父さんが言う。

「わからないわけがないでしょう！一年ぶりだもの、そんなに変わっていないし。」

「そうだよなあ、一年ぶりだもんな。お前、元気そうだな。よかった。」

「叔父さんこそ元気そうでよかった。今年は来ないのかってウワサしていたんだから。」

叔父は外国をふらふらと飛び回っている。

ジャーナリストのはしくれなんだよ、と言っているけど、記事なんて見たことない。

桜が大好きで、どんなにいろんなところに行っても、いつも桜の頃に日本にやってくる。

それなのに日本全国あらゆるところの桜が散っても、今年は来なかった。

どうしたのかと家族ではウワサをしていたのだ。

ああ、話し方もなにもかも、叔父さんそのものだ。

知っている人がいて、急に力が抜けて、ちよつと涙が出てきた。

「あら、絹花が泣いちゃったわ。おじ様、ダメじゃありませんか！だから後でにしてくださいって言ったのに。」

「いやいや、泣かせる気なんてなかったんだよ、レティ。おい絹花、泣かないでくれよ。」

…ぴたつ、と涙は止まった。

何故って？

私以外に叔父さんをおじさんと呼んだ人がいる。

しかも、それは、女王陛下…のような気がする。

リセさんの声じゃないもん。

でも、叔父さんはそんなに年じゃないし、女王陛下に「そのおじさん」って言われるような見かけでもないし。。。

え、「おじさん」って何か役職とか係とかあったり…、って、もう

いいわ。

「ヘイカ」も役職じゃなかったから、もう無駄。

「えっと、あの、陛下。」

ここに来れば説明してくれる人がいる、と聞いてきたのですが、説明していただけませんか。

私がここに来たこととか、陛下もリナス叔父さんをおじさんと呼ぶのか、とか。」

びっくりしすぎて声が震える。

だって一番考えられる可能性は、女王陛下が、私の従姉妹、ってことだったから。

あ、それか、叔父さんこつちの世界で誰かと結婚したのかな。

叔父さんは父とは年の離れた弟で、35歳だけど、まだ独身だ。

そっちの方がまだわかりやすいか。うん。

「ごめんなさいね、そんな風に驚かせるつもりじゃなかったのだけ
れど。」

そうね、まずはお話ししましょうね。

まず、私の名前はレティシア。

レティって皆呼ぶけれど、あなたには別の呼び方をして欲しいん
だけれど。」

これまたにつこり笑って話し始めた女王陛下。

かわいい…、って、見とれてる場合じゃなくて。

別の呼び方？あだ名か？？

「別の呼び方ですか？陛下ではなくて？」

女王陛下はそんな私に、ちょっと照れたように答える。

「違うわ。お姉さん、って呼んで欲しいの。」

「へ？」

ものすごいバカっ面だったと思う。

こんなところにいきなり来たのも、叔父さんがいるのも、女王様が叔父さんをおじさんって呼んだのもびっくりした。

でも、一番びっくりしたのはこれだ。

なぜ、私がお姉さんって呼ばなくてはいけないんだ？

いつものようにバカな可能性が頭の中によぎらないくらい、私は真っ白だった。

「私は、あなたの姉なのよ、絹花。」

城・02(後書き)

「実はおねーちゃん」登場です。

あ、ちなみに主人公の名前、「きぬか」と読んでください。

「私は、あなたの姉なのよ、絹花。」

二の句が継げない、というのは、こういうことなのだろう、と思う。なんだかよくわからなくなってきた。やっぱり夢を見ているのか？私は……。

「おい、絹花。大丈夫か？」

「へ？」

気がつくど、カイが心配そう中を押して私を支えてくれていた。

「いや、倒れかけたから。驚いたんだぞ。」

そ、それは誰の話、って言うか私？

どうやら私は一瞬倒れかけたらしい。

この二十一年間、一度だって倒れかけたことなんてないのに、それも驚きだ。

とはいっても、もともと膝立ち状態、大した高さはなかったのだが。

「大丈夫、だと思う。多分、もうこれ以上びっくりすることもないだろうから。」

そうか、私、一人っ子なのかと思っていたけど、違うんだ。

五千万歩譲って一人っ子じゃなかったところは信じたとしても、そもそもあんなに綺麗な人がお姉さんだなんて信じられない、って、

私、思ってること全部声に出ている気がするんだけど。」

「そうだな。全部声に出てるな。」

冷静に突っ込まないで欲しい、カイ。

そうか、思ってることダダ漏れですか。

「絹花、本当に大丈夫？」
女王陛下、もとい、お姉さま！が心から心配そうな顔でこちらを見ている。

よくよく見れば、父さんに似ている気がしてくるから不思議だ。

「はい、大丈夫です、続けてください。

でも、失礼してこのまま座っていてもいいですか。」

このままだと、また倒れそうで、お姉さまに言ってみる。

若干自棄だ。

「もちろんよ、本当に大丈夫なの？そう、では続けるわね。」

カイにお礼を言っけしっかりうなずき返した私を見て、陛下、いや、お姉さまが続けてくれる。

「この世界とあなたの住む世界は、あるゲートでつながっているわ。それがあるのが時の神殿の時の扉、あなたのたどり着いたところね。」

そのゲートから、時の扉から絹花は出てきたわけ。

そしてあなたの世界のゲートは、様々な場所にある。

なぜかはわからないけれど。

あなたがここに来たときに辿ったものも、そのうちの一つよ。

ふふ、どんなふうにしてこちらにやってきたのか、今度聞かせて頂戴ね。

そして、この世界の、というより、この国の人間は二十歳の時に一度だけ

ゲートをくぐってもいいことになっているわ。

そして最低七日間滞在してこちらに戻ってくる。

行かなくてもいいし、戻ってこないこともあるわ。

ただし例外を除いて必ず一度だけね。

それ以上はゲートが通さないの。」

ゲートが、通さないって、何だ？

「通ろうとしても、ゲートが開かないってことですか？」

「そう。ゲートが発動しないの。」

通常は七日周期で開くのだけだね。

例え他の人が通ろうとして開いたゲートでも、一度通った人が通ろうとすると、

ちゃんとその瞬間ゲートが消えるのよ。

理由はわからないのだけれどね。」

どさくさに紛れて入っちゃえー、とか、そういうことはできないんだらうか。。。。

「では、父さんと母さんは。」

「この国の住人。」

もっと言つと、お父様はわたしの前の王だったし、お母様はお妃様ね。」

な、なんだってー？！

「王の子供たちは例外を除いてゲートは渡らない。」

お母様は二十歳の年にちょうど大きな怪我をしていたからゲートを越えなかった。

だから、偶然にも二人とも一度もゲートを越えたことがなかった。

だから、貴方のいた世界へ飛ぶことができたのよ。

二十歳ではなかったけれど、強い力が可能にした。

それはあなたがまだお母様のおなかにいるときのできごと。

その旅立ちの日から私は女王になった。」

そうか、あの両親、実は王様と王妃様だったのかよ。。。
そして、その後を継いでお姉さまが女王陛下に。。。
でもお姉さまはそんなに年上に見えない。
ということは、子供のときに親と別れたということ？

「あなたの世界はね、こちらの世界の倍の速さで時が過ぎていくのだそうよ。

私が女王になったのは、ちょうど十年前、十五歳のときだったわ。
ああ、あなたには兄もいるのよ。もうすぐ来ると思っただね。

あなたの兄で、私の弟、ハルは十二歳だった。

花盛りの中、お父様とお母様をお見送りに行ったのを覚えているわ。」

それでもそんな頃に別れて。

私が独り占めしていたってこと
でもなぜ？

「順番に話しましょう。」

この国の王族について。

まず、王族にはたいていの場合子供が二人授かるの。

一人目は王、または女王になるもの。

二人目は王、または女王を支える力を持つものよ。

でもね、言い伝えがあるの。

王族に三番目の子供が出来たとき、その子にはある不思議な力があるはずだ、と。

その力ゆえにその子は世界の悪に狙われてしまう。

だから無事に育つまで、お父様とお母様はあなたと一緒に別の世界で暮らすことにしたのよ。

幸いにもあの世界にもこちらから行ったものはたくさんいてね。暮らしていくには困らなかった。

国や人の特徴だって、いろいろなところがあるのでしょっ？」

「ええ、父さんはフィンランド、という寒い国の出身、母さんは日本、私がいた国の出身、

ということになっていました。」

「そしてあなたは一度だけ通れるゲートに導かれ、この世界に戻ってきた。

お母様のお腹の中にいた時のことは、カウントされていないでしょうから、

大丈夫、あちらに帰りたいと思うならば帰れるはずよ。

時が満ちた、そういうことなのかしらね。

いつか帰ってきてくれると信じていた。

でも、あなたが一人で帰ってくるとは思わなかった。

カイがそんな予感を感じなかったら、あなた一人で寂しかったわね。」

「カイが？」

なんか、突っ込みどころが満載過ぎて、若干置いていかれそうなところを、

気力を振り絞る。

で、カイが、私に来るって、予感した？

なんで？

「そう。まあ、大賢者の力、ってことかしらね。

そして、肝心なあなたの特別な力、それはね、銀の鷹を見つける

力なのよ。」

カイの予感のことは、軽く職業上の理由みたいなもので片づけられてしまった。

そして、いきなり私の特別の力なるものを言われたけど・・・

銀の鷹って…、ナニソレ。

日本野鳥の会とかに入っておいた方がよかったのかしら。

城・04(前書き)

長さが一定でないですねー (^| ^・;) これはちょっと長い? のかな?

「肝心なあなたの特別な力、それはね、銀の鷹を見つける力なのよ。」

「銀の鷹？」

銀色の鷹なのだろうか？突然変異？
でも、そんなの誰にでも見えるはずでは・・・、ないのか？
これがファンタジーな世界なのか？

「鷹の精霊とか言った方が近いのかしら。」

本当に銀色の鷹かもしれないし、銀色をした何かかもしれないわ。
いずれにしろ貴方にしか見えないの、絹花。」

「それが見えるからって、何で狙われないといけないんですか？」
「銀の鷹には、大いなる力が隠されている、とされているの。
世界を変える力があると。だからこそ悪は銀の鷹を欲しがる。
そしてその銀の鷹を探せる唯一の存在を狙うの。」

やばい、本格的にファンタジーの世界でした。
何かわからない銀の鷹と、悪？悪の組織？マジで？

「悪、って、誰のことなんですか？」

「それもわからないの。
人の形を取るのか、概念なのか、精霊なのか。
全てが謎。」

でも、絶対的な悪であることは否定できない存在、とされている。

「なんだかすごい力なんだか、すごい危ないんだかよくわからないな」

あ。

「銀の鷹も悪の存在も、とつても不明瞭なんですね。」

「伝説なのよ。全て伝説。本当かどうかは誰にもわからない。」

でもね、前に銀の鷹が現れたのは千年前だというわ。

そのときに銀の鷹を見つけた王子は、銀の鷹を守って命を落としたり、とされている。

しかも王家に三番目の子供が生まれるのは本当に稀なの。

それを知っているから、お父様もお母様もあの世界に行ったのよ。

あなたが大きくなるまで、あなたを守るために。」

うー。父さんと母さんは、そんな千年前の伝説で本当かどうかわからないことなのに、

まだ小さいお姉さんとお兄さんを残して別の世界で暮らす決断をしてくれたんだ。

ありがたいけど…、重い。重すぎる。

でも、思いと言っていては仕方ない。これが現実。

だとしたら。

「それで、私がこの世界に来た、ということとは、

私はその銀の鷹を探さなくちゃいけない時期が来たから、ってことなんですか？」

まずはその役割に、目的に沿ってみるしかないのかな、と。

「それはわからないわ。

私はあくまでも伝説と王族を取り巻く事実だけを語りました。

この後どうなるか、わからないわ。

でもね、銀の鷹は、あなたが見つけられない限り、一人で飛び続けるしかないの。

それは確かなことよ。

だってそうでしょう？あなたにしか見つけられないのだから。」

へ？

だって、なんかよく知らないけど、大いなる力があるんでしょう？

「銀の鷹は、見つけてあげることがいいことなんでしょうか。」

「もしも私が銀の鷹を見つけた、としたら、お姉さまはどうなさるんですか？」

「そうねえ、悪の手には渡したくないと思うけれど、

それ以外は銀の鷹の思うとおりによければいいと思うわ。」

別に私はこの国の人が穏やかに暮らしていければいいと思うけれど、

何かの力で世界を変えたいと思わないし。

そもそも世界を変える力なんて物騒なもの、私に使いこなせるの
かなんてわからないしね。」

まあ、ここにいたいのならここにいたらいいし、どこかに行きた
いならとめないわ。」

ただ、せつかくお知り合いになったんなら、無事に過ごさせること
をを祈り続けるわね。」

・・・。

「ムリに捕まえたりしない？」

「そんなことできないし、する必要もないもの。でも、一度会って
みたいのは確かね。」

・・・このお人よしつぶり。

普通、世界を手に入れる、とかって、為政者の夢じゃないの？

野心とかそういうのまるでないんだな！

この人は、絶対にあの父の、母の、娘だと思う。

大好きすぎる！

「・・・見つけるか、見つけられるかどうか、考えてみます。」

「そうね、そんなに簡単に出来る結論ではないわね。

私はあなたにはその力があるって思うけれど、見つけれられるかどうかすら伝説ではあるのだし。

では、次に世界の扉が開く一週間後まで、まずはこの城に滞在してね。

どちらにしても扉が開かないから、あなたはそれまでもこの世界には戻れないのよ。

今ここにいる皆に、それぞれ案内してもらおうから、まずはこの城の中心を見てちょうだい。

そして意見や改善点や素敵なことがあったら、教えてもらえるとうれしいわ。

一週間たって、もう少しここにしようかな、と思うようなら、もちろん大歓迎だし。

ずっとここにいてくれると、本当にうれしいのだけれど。」

「・・・お姉さま、欲がないって言われませんか？」

「あら、少し話したただけなのに、絹花もそう思っちゃうの？」

私、自分の利益を計算するのが不得意なのよ。

国のことなら何とか考えるけど、私にできるのは改革ではなくて維持だつてわかっているの。」

この人は、私にムリに銀の鷹を探さなくてもいいって、言うんだ。

その力は伝説とは言え、悪い存在が狙うくらいに大きいもので。

しかも見つけたとしても銀の鷹の好きにさせてくれるって。

自分にそんな力があるってわかってても、そんな存在をたとえ見つけられたとしても、

私のせいで誰かが拘束されたり、無理強いされたりするのは嫌だなって、思っただけれど。

お姉さまは私が嫌だと思うことは、どんなことでもしないでもいい、って言っているんだ。

・・・なんだかまた涙が出てきそうだが、よくわかんないけど。まだ出会ってちょっとだけど、お姉さま、大好きだー！

と、じんわり感動していると、大きな足音が聞こえる。大きな足音、というか、誰かが全力ダツシュしてる音だ、誰？

扉が開くと、誰かを探す風で、王子様が入ってきた。

そう、王子様。王子様と言わずして何と言おう。

金髪の巻き毛に青い目。

つて、もしかしてもしかして、うわー、もしかして？！

「絹花？絹花なのかい？

待っていたよ、よく無事に着いたね。」

…むぎゅ。

いきなり王子様に抱きしめられる。

ぎゅー、つて、おいおい、ちょっと待って。

王子様、苦しい。ギブ！もうギブ！

華奢に見えるのに、何その力技！

「こら、ハル。ぬいぐるみじゃないんだから、とりあえず離せ！落ち着け！」

「そうだぞ！

俺だって叔父さんだぞ、久しぶりー、つて、抱きしめたいところをこんな場所だから一応こらえたって言うのに。

しかも、俺だってお前に力いっぱい抱きつかれたら、痛いんだからな！

華奢な見かけのくせにこの莫迦力！」

カイと叔父さんがあわてて金髪王子をたしなめる。

でも、そのたしなめ方もどうなの、いったい。

「ああ、ごめんごめん。つい、ね。大丈夫だった、絹花？」

王子様がはつと気づいて、ようやく腕を緩めてくれる。

そして、満面の笑みでにっこり笑って私の顔を覗き込んでいる…。

うわー、ありえない。
ありえない、のだが、ここまでの展開、まんべんなくありえないので。

あの美女がお姉さまだったら、この王子様も、もしかしたらもしかしてもしかすると。

「ええと…、その…。お兄さま、ですか？」

…恐る恐る聞いてみたら、ものすごいうれしそうな顔で笑った。
うわー、もう大変だ。

王子様スマイル、大盤振る舞いだよ！

「そう、ハルだ。よく来たね、絹花。」

それにしても。

しゃべり始めるといつまでもボケ続けるから私がツッコミ入れないと止まらなかつたけど、

確かに父さんも母さんもしゃべらなければ、とっても綺麗だったけど。

なんで私はあの二人の娘なのにこんななんだろう、って思ったこともあつたけど。

こんなに綺麗な娘と息子がいるんだから、逆に私のほうが本当の娘か怪しいくらいだなあ…。
とほほ。

「ハル、遅かつたのね。」

もう少しでリセに様子を見に行ってもらおうかと思っていたところだったのよ。」

「姉上、申し訳ありません。ちょっと塔の方まで行っていたもので。」

「ああ、美形姉弟の会話！目の保養だわー。」

「そうなの、それでは仕方がないわね。」

「ご苦労様。さて、これでそろったわね。」

絹花、では改めてみんなを紹介しましょうね。」

「そうだ、叔父さんでびっくりして、つい話を先に聞いたけど、まだ知らない人もいるし。」

「ここにいるのは私の補佐役たち。」

リナス叔父さまはわかるわね。」

叔父さまは『時渡り』と言って、あのゲートを何度も行き来できる力を持った人です。」

「え、一回だけじゃないの？」

「ああ、普通はね、一回だけなんだけど、時渡りだけは何度でも行き来できるんだ。」

「だからお前のところにも年に一度行っただろう？」

「へえ、そうなんだ。そんな人は叔父さん以外にも何人もいるの？」

「いや、時渡りは一人だけ。俺が死んだら、誰かが時渡りの力を継ぐことになるな。」

「そうなんだ。」

「たった一人だけ行き来できる力を持つって、なんだか不思議だなあ。」

「カイはわかるわね。」

「あなたを迎えに行ってくれたけど、これでも本当は大賢者の一人
で、

賢者の塔でふんぞり返っているような偉い人なのよ。」

くすくす笑いながらお姉さまはカイを紹介してくれる。
それにしてもふんぞり返ってるって！

きつと豪華な椅子にもものすごい勢いでどっかり座って偉そうに！

「お前、今、私がものすごい椅子に、えらそうに座っているのを
想像したろう？」

え、どうしてわかるのよっ？！

「そ、そんなこと思ってないわよ。変なこと言わないでよ！」

カイはフン、とちよっとすねたような顔をして笑いつつ、お姉さま
に言う。

「どうだかな、顔に書いてあるぞ。」

陛下も変なことをおっしゃらないでください！

所詮私はあの爺様たちの間ではただのハナタレ小僧ですからね。
相変わらずくすくす笑うお姉さま。」

「それもそうね、あの人たちの前では誰でも仕方がないけれどね。
それから、エディは初めてよね。」

エディは大神官の一人。賢者の資格もあるんだけど、神官でいる
のよね。」

さつきからそつとりセさんの隣に立っていた穏やかそうな人が、ゆ
っくりと微笑む。

栗毛色の髪がふわりと揺れる。

いや、本当にかわいい。絶対かわいい。

「賢者より神官の方があっているみたいですからね、僕には。」

はじめまして、絹花。」

「はじめまして、エディさん。あの、よろしくお願いします。」

「はい、こちらこそ。ああ、エディと呼んでくれて構いませんよ。」

「いえいえ、そんなわけには。」

「あなたのはリナス様から話を聞いて、陛下とハルがいつも噂
をしていたから、」

あまり初対面のように感じないのです。

だから、どうか普通に接してくださいね？」「
ああ、またにこりと笑われた…！」

「カイのことはもう呼び捨てにしているようなのに、変な子ね。
まあ、好きにお呼びなさいな。
そしてリセね。」

リセは別に私の侍女をしてきているわけでもなくてね、れっきとした舞姫なのよ。」「
リセさんがこちらを見る。

舞姫？つてよくわからないけど、お似合いです！

「まあ、陛下の侍女役はたまに趣味でやっているようなものだな。
滞在中は絹花の面倒は私が見ようと思っっているから、何かあったら何でも言ってくれていい。」

なに、舞姫の長からもお許しはいただいたので大丈夫だ。」「

「舞姫つて、踊るのがお仕事？」「
「まあな。」

神殿には女性の神官もいるが、舞姫も神殿に属している。

その仕事は文字通り踊ること。
精霊に踊りをささげるんだ。」「

「リセさんが踊るのみてみたいなあ、きつとすごく素敵な気がする。」

「
というか、本当にタカラヅカみたいにかっこよくて素敵なんだろうなあ。」

「ありがとう、私が案内したときに、ではお見せしようか。」「
…？案内？」

「最後はハルね。」

ハルは王子でもあるから、まあ、王子ですって城にいればいいんだけど、

この人は今は騎士団にいるのよ。

「一応騎士団長をしているけれど。」

「一応は余計でしょう、姉上。」

「これでも頑張ってるんですから。」

「につこりこちらに笑いかけながらお兄様が答える。」

「絹花、ぜひ騎士団にも遊びに来てくれ。」

「自慢の妹、と紹介したいところだが、しばらくは黙っている、でしよう？姉上。」

「え？黙っている、ってどういうこと？」

「その通りよ、ハル。」

「絹花、あなたはしばらくの間、私の妹である、ということは隠しておいてもらおうわ。」

「悪がどんな存在かもわからない。」

「しばらくは異国から迷い込んだ客人と言うことに城では扱います。そして、これから賢者の塔、神殿、騎士団、舞姫の間、時渡りの塔と」

「回ってもらおうと思うのだけど、その間も偽名で変装して行って」

「もらうからそのつもりでね。」

「変装ですか。」

「そう、変装。そして偽名。」

「とりあえず明日はカイ、あなたが賢者の塔を案内してあげて頂戴。」

「」

「私ですか？」

「そうよ、せっかくお迎えに行ってくれたんだもの。」

「絹花だってまずは顔見知りからの方がいいでしょう。」

「明日の朝、迎えに来て頂戴ね。」

「はあ、仰せのままに。」

「さ、では、今日はこれで解散。」

絹花は食事までまだ間があるわ。

湯にでも入ってゆつくりしてね。

ああ、夕食はね、必ず案内してくれた人と私とで毎日とりましょね。

その日の出来事を報告してちょうだい。

今日はせつかくだから、ハルと叔父さま、家族四人でいただきましようか。」

お姉さまがそう言って、その驚愕のご対面は終了したのだった。

城・04(後書き)

第二章終了です。

「この格好で本当に大丈夫かなあ。変じゃない？」

「お前、さつきリセに太鼓判押されていたらう。」

大丈夫だ、どこからどう見ても、どこかからやってきた神官志望の小僧にしか見えないから。」

「そうはつきり言われるのも、なんか微妙な気がするんですけど。」

この世界に来て二日目。

とうとうこれから日替わりでいろいろな場所を巡る、お姉さまいわく「視察」が始まってしまった。

今日はカイが賢者の塔を案内してくれることになっている。

それにしても、女王陛下の妹であることは隠し、変装するように言われたけど。

「まさか男装させられるとは思っていなかった。」

「そうだな、たまに突拍子もないこと考えるからな、あの人は。」

まあ、あきらめろ。

ところで、今日はシリルって呼べばよかったんだな。」

「そうです。今日の私の名前はシリルです。」

どんな格好をするのかと思いきや。

まさか男の子の恰好とは思わなんだ。

まっすぐで面白みがない、と、ちょっとだけ思っている髪は、

今日はきれいな緑の紐でひとまとめにされている。

リセさんがまとめてくれたのだ。

ベージュと焦げ茶が基調の服は、しっくりと落ち着くし、文句はなしのだけだ。

そして偽名よ、偽名。

ちゃんと呼ばれたら返事しなくちゃ。
シリル、シリル、私はシリル。

「ええと、カイのこと、カイって呼んだらまずいよね？」
どうしても迎えに来てくれたときから、初めて会ったような気がしなくて、

つい馴れ馴れしく呼び捨てにしているけど、実は偉い人みたいだし、
そもそも年上だし、
どう考えても呼び捨てはまずいよね。

「別に私は構わないのだが、神官志望の小僧には呼び捨てにするものはないからな。」

お前に呼ばれるのもなんだかうすら寒い気がするが、仕方がない。
今日一日は、私のことは『カイ殿』とでも呼んでおけ。」

「えー、『カイ様』って呼ばいいんでしょう？」

呼ぶよー、大丈夫だよー。」

「しかし。お前に様と呼ばれるのはどうも。」

「何よ、気にしなればいいでしょう？」

だってさつきからすれ違う人、みんな『カイ様』って呼んでるじゃない。

一介の神官志望者が『カイ殿』って呼んだら変だよ。」

ちよこちよこと賢者の塔の中を案内してもらっているのだが、
すれ違う人みんなに『カイ様』と呼ばれているのだ、この人は。
しかも、けっこう尊敬されている感じで。

女王陛下の補佐、というのは、普通に立場的にも偉いんだろうけど、
立場を超えた尊敬、つばいのが垣間見られる。

それってやっぱりカイはすごい人ってことなんだろうなあ。

「かなり気に入くない。しかし、しかたがない、か。」

…我慢しよう。」

「大丈夫、大丈夫、失敗しないようにちゃんとそれらしく振舞うからさ。」

ため息をつきながら、それでもそれぞれの場所を詳しく説明してくれるカイの隣で、

私は初めて見るはずのこの塔のもの全てが、妙に懐かしく感じることを不思議に思っていた。

賢者の塔は、神殿に囲まれた城のすぐ隣に位置している。

大きな塔で、高さもあるが、思っていたよりも広い。

神官は通常、自分の属する精霊の神殿に仕える。

太陽、水、大地、風、月、樹の神殿があるんだそうだ。

自分の属する精霊の力を使えるが、中には全ての精霊の力を使うことができない人たちがいる。

それが賢者と呼ばれる人たちなのだそうだ。

賢者として認められると、この賢者の塔に属し、三年間の修行を経て、それぞれの修行や研究をすることになる。

カイは七歳で神殿に入り、十七歳で賢者として認められた。

二十歳で一人前の賢者と認められてすぐに、大賢者の一人が亡くなった。

大賢者は六人いて、この賢者の塔を率い、城を支えている。

大賢者は『賢者の石』と呼ばれる大きな結晶に賢者全員が順番に手をかざし、

結晶が光ったものが選ばれることになっている。

そして賢者になってたった三ヶ月のカイは、最年少の二十歳で大賢者選ばれたのだそうだ。

「…それってすごいじゃない。」

「別にすごくない。たまたまだ。」

「いやいや、運も実力のうち、って言うよ。」

「…お前、ほめてるのか、どうでもいいのか、どっちだよ。」

「いやいやいやいや、ほめてますよ、カイさま。心から。」

そんな話をあまり話したがないカイから無理やり聞きだしながら、塔を歩く。

長い廊下を曲がった途端、綺麗な女性達にぶつかりそうになった。

「きゃあつ。」

「わ、ご、ごめんなさいっ。」

しまった、話に夢中になりすぎた。

今まですれ違った人たちは、みんな長い真っ白なローブを着ていたが、三人の女性たちは普通のドレスを着ていた。

普通のドレス、といっても、よくわからない私から見ても、いかにも高そうなドレスだった。

ぶつからないように後ろから私を引っ張りながら（猫みたいな扱い！）、

カイが女性のうちの一人に話しかけた。

「これは、エミール様。どうしてこちらに？」

「まあ、カイ様ではございませんの。」

お久しぶりでございますわ。

今日は父のところへ届け物がございましてこちらに伺いましたのよ。」

母と同じくらい年だろうか、三人の中で一番豪華なドレスを来た人が答える。

残りの二人は、彼女の侍女、というところなのだろうか、年若い二人だ。

その人は私をちらつと見ると、カイに尋ねる。

「カイ様、そちらの方はどなたですか？

お目にかかったことがあったかしら？」

できるだけ触れられないように、そつとカイの隣に立っていたのだが、無視してはもらえなかった。

今まではそれで済んでいたのにな。

うー、しょうがない。

挨拶しないわけにいかないよなあ。

といつても、いつものお辞儀や会釈が、ここでのデフォルトかわからない。

そこで、昨日ハル兄さんがお姉さまにしていたお辞儀を思い出して、私はエミール様、とやらにお辞儀をした。

…、うん、こんな感じだったと思うぞ。

「シ、シリル。申し訳ございません、エミール様。

この者はシリルといって、神官希望としてきたものなのです。

父上が騎士で、いたく尊敬している様子、お許しいただければ。」

せつかくお辞儀をしたのに、カイは大あわてて私を立たせようとする。

かなり動揺している声色だ。

え？私のお辞儀、なんか変だったのかしら？

「まあ、カイ様のそんなに慌てられるお姿など、初めて見ますわね。オホホホホ。大丈夫ですわ、お気になさらないで。

シリル、でしたね。お父様を尊敬なさっていたのね。

あの方がいなくて私がもう少し若かったら喜んでその礼も受ける

のですけれど。

カイ様のような立派な賢者様を目指されるといいでしょう。がんばってね。」

エミール様はにっこり笑いながら私に声をかけてくれる。

「はい、ありがとうございます。頑張ります。」

これは笑顔で返さねばなるまい。

…この後のカイが怖いけど。

「では、ごきげんよう、カイ様。

またどこかでお目にかかれるといいわね、シリル。」

笑いながらエミール様は去って行った。

よっぽど私が面白かったらしい。

面白かったのか…そうか…、そうかじゃないよね、やっぱり。

エミール様が行ってしまうと、カイは大きく息をついて、こっちを見た。

「カイ様、ちよつとどこか…」

ゆっくり話ができるところを、と言いかけたら、言葉をさえぎられた。

「ああ、ちよつと待て。

ああ、そうだな、しょうがない。

ここでいい。とりあえず入れ。」

ちよつと焦ったように、手近の扉から中に押し込まれる。

入ったところは広間だった。

特に何かあるわけでもなく、壁一面に綺麗なレリーフが施されている。

でも、見とれているわけにもいかない。

早めの状況確認が鉄則だ！

「ここなら誰も来ないだろう。」

「ここは？」

「儀礼の練習をするところだ。」

例えば就任式とかいろいろな所作を練習するところ。

だから、お前に礼の仕方を教えるのには、ちょうどいい。」

あ、やつぱり。。。

「ということは、私のお辞儀、そんなにまずかったのね？」

顔をしかめながらカイが尋ねる。

「あの礼、昨日のハルの礼の真似か？」

「うん、それ以外に礼を見なかったから。」

私が習ったのって、女性の礼みたいだったし。」

そう、私が陛下の前で取った礼と、リセさん以外の礼は違っていたから、

あれは女の子用なんだろうな、と思った。

「そうだな、昨日のお前のは確かに女性の礼だから、今のお前には不適當だ。」

だがな、この世界ではそれぞれの礼の仕方がある。

特に騎士と神官や賢者の礼は異なる。

だが、一つだけ一緒の礼がある。

それが、さつきお前がした礼だ。」

え、礼が違うの？

…正直、めんどくさいなあ、と思いつつ、ちょっと安心する。

「じゃあ大丈夫なんじゃないの、ものすごい失敗したのかと思ったわよ。」

にっこり笑って答えた私に、相変わらずしかめつらでカイが答える。

「いや、ものすごい失敗したんだよ、お前。

なんで共通なのかというと、それは最敬礼だから。

女王陛下の前では、騎士であるハルも、神官のエディも私も同じ礼をする。

でもそれは女王陛下に対してだからだ。」

んー？

「ってことは、私、女王陛下にする礼を、さっきのエミール様にしただってこと？」

「そうなる。」

なるほど、女王陛下扱いかー。

そりゃまた敬い過ぎってことなのかな？

「そしてあの礼を王、または女王や、例えば大賢者や神官長、騎士団長や巫女長以外にすることは、

別の意味が発生することがある。

男性が女性にした場合にはな。

最敬礼を異性にするってことは、どういうことか。考えてみる。」

…ちょっと怖くなってきたわ。

「お母さんを大事にとかじゃないよねえ？」

「バカかお前。」

あ、やっぱり。

「バカバカ言わないでよ。

やばいと思って青くなってるんだから。

それってもしかしくなくても、結婚の申し込み？」

「その通りだ。」

うわー、それでエミール様、あんなこと言ってたんだ。

「エミール様は笑い飛ばしてくださいでしたが、お前、他の女性に対し

てやってみろ、

かなりやばいことになる。

だから。」

「もう、とっとと教えてください、正しい礼の仕方を。」

これ、明日の神殿周りでも使えるのよね？

あさって騎士団を回る前に、お兄様にも教えてもらわなくっちゃ。

」

そういう大事なことはさー、朝一番に説明しようよ！

そうでなくてももうっかりなんだから、勘弁してよ！

焦りまくって若干涙目で訴える私に、カイは今日何度目かのため息をつきながら、

正しい礼の仕方を教えてくれた。

その所作は流れるよう。

私がさつきやった時、案外いい感じ、なんて思ったのが間違いでした、と謝りたい。

踊ってるみたい。

…かなり背の高い人なのに、礼をするだけでこんなに優雅で信じられないくらい綺麗なのって、なんだかずるい気がした。

七人目の大賢者 02 (前書き)

ちよつと間が空きました……。すみません。

七人目の大賢者 02

「ここが私の部屋だ。」

しっかり礼の仕方を見つけた後（笑）、ひとしきり塔の中を見せてもらって、

一休みしようと、カイの部屋へ案内してもらった。

塔の上の方にある、七つの大賢者の部屋のうちのひとつだと言う。

実は塔は八角形で、真ん中の階段を中心にした回廊と部屋が並ぶ。

大賢者の部屋がある階は、ちょうど八等分にした辺の一つ一つが部屋、残りの一つは

広くなっていて、大きなテーブルと椅子が置いてある。

大食堂！みたいな感じだったが、カイいわく、ここで大賢者の話しあいをするのだそうだ。

「でも、部屋になってなくて、聞こえちゃいけない話とかできないんじゃない？」

素朴な疑問を試してみた。

だって、重要なこととか話しあうんじゃないの？

「そういう時は、話が聞こえなくなるようにするから問題ない。」

「へー……」

もう、ファンタジーすぎても驚かないけどさー、そうかー、結果まで出てくるのかー。

カイの部屋は広いのに、造り付けの棚に大きなテーブルと椅子、来客用の長椅子と

小さなテーブルがあるくらいで、とてもシンプルだった。

さすがに棚には本がぎっしり並んでいたけど。日当たりのいい大きな窓辺には、小さな木の鉢が一つだけ置いてある。

来客用の長椅子は思ったより居心地がよく、うっかり長居をしてしまいそうになる。

香りのいいお茶を出してもらって、更にリラックスしてきた。

「大賢者って七人いるのよね。」

「いや、六人だ。」

「え、だって大賢者の部屋って七つあるってさっき言ったじゃない。」
「残りの一辺がああの広間なんでしょう？」

「ああ、いつか七人目の大賢者がいた時期があったのだそうだ。」

そして、今後いつか現れるかもしれないその人のために部屋だけは残っているが、

通常は六人だ。

七人目は特別なんだ。その認められ方自体が特殊らしいしな。」

「賢者の石、だっけ？それに選ばれるんじゃないってこと？」

「ああ、直接全ての精霊がその人に祝福を贈るらしい、というところくらいしか

わかっていない。もしかしたらヨール様ならもう少しご存知かもしれないが。」

「全精霊が祝福、ってなんだかすごいね。ところで、そのヨール様ってどなたなの？」

「ああ、ヨール様は……」

カイが話しかけたその瞬間、部屋のドアがノックされた。

「はい。」

カイが答えてドアへ向かう。

開いたそこには、なんともかわいらしいとしか言いようのないおじいちゃんが

そっと佇んでいた。

「ヨール様、いかがなさいました？今日はお休みのはずでは？」

え、この人がさっきの噂のヨール様？

確かに博識だつて言われても納得いく風格があるといえはあるけど、結構かわいなおじいちゃんと言われたらそれまでつて言つか。

「ちょっと思い出したことがありますの。

塔に来てみたらなにやら気配がしますし、こうして訪ねてみた、と言っわけでの。

入ってもよろしいかの。」

「ええ、もちろんです、どうぞ。」

おじいちゃんは長椅子の私の隣にちょこん、と座ると、私を見てにっこりと微笑んだ。

つられてにっこり笑ってしまった。

カイが、とてもこの人のことを大好きなトーンで話そうとしていたから、

きつと尊敬していてすごく素敵なんだろうなあ、という先入観も手伝つて。

そういえば私、この国に来て以来、笑いかけられてばかりだな。なんだかうれしい。

「今、まじないをかけたでの、ここでの話は聞こうとする大賢者以外のものには

聞こえないはずじゃ。」

お前さん、よく来たの。
名前を覚えてくれるかな。」

おお！こんなに早く結界？を体験するとは！！
って、そうじゃなくて！

えっとー、これはー、やつぱり、もしかしなくてもちちゃんとわかってるってことだよ、ね？

カイの方を見ると、ちよつと苦笑してうなづく。

「はい、はじめまして、絹花と言います。

今日はシリルって名前なんですけど。」

「ほう、絹花、か。よい名前じゃの。」

わしはヨールと申す。ここのカイと同じく大賢者の一人じゃ。」

カイがヨール様にお茶を出しながら、言う。

「絹花、ヨール様は大賢者のお一人だが、三年前まで、女王陛下の補佐役を務められていた。

そして、私のお師匠様だ。」

わー、お師匠様なんだ。大好きなんだろうなー。

って、お姉さまの補佐役、ってことは、お姉さまが女王になった辺りの経緯も

もちろんご存知で、だから私のこともご存知なんだろうなあ。

ん？でも、さつき心配っていった？

「ほっほっほ。

できが悪くても弟子は弟子ですからの。

ちよつとの恩は大いに返してもらわねば師匠なんぞ損な役割での。面倒な補佐役をこのハナタレ小僧に任せて、今は悠々自適の隠居生活の真似事を

しておりますよ。

なに、大賢者なぞこれを除けば年寄りばかりじゃからの。

まとめる必要もありませんで。

まして他の者たちは、どうもこの弟子には甘いようでの。」

「いや、他の方々からは、師匠が一番私に甘いともっぱらの評判なんですけれど。」

い、いいコンビだ、この二人。

ぼけ続ける爺ちゃんにさりげなく突っ込みを入れているカイっていうのも笑える。

それにしても、昨日も言ってたけど、本当に皆にハナタレ小僧扱いされてるんだなあ。

「ところでヨール様。さっき心配っておっしゃいましたけど、私の、ですか？」

「おお、そうじゃ、お前さんに渡したい物がありましたの。

これの隣が私の部屋なんじゃが、ちよっと来てもらえるかの。

なに、隣までじゃ、カイはここにいてええぞ。」

カイが眉をひそめて不機嫌そうな顔をしている。

「…何か変なことを絹花に吹き込むつもりじゃないでしょうね。」

それを聞いてヨール様は、これまたにっこり笑って答える。

「お前、師匠をちよっとは信用せんか。

それともわしに話されて困るようなことを、今までの人生でしてきたのか？

だったら今度酒でも飲んでいるときに、じっくり教えてもらわねばな。

何、会話以外はお前にも感じられるようにしておいてやる。

何かあつたら飛んで来い。」

そこまで言い切られ、結局カイは付いて来られず、私はヨール様のお部屋に

一人でお邪魔することになった。

ヨール様の部屋は、カイの部屋とほとんど同じ作り、の筈だが、まるで感じが違った。

大きな植木鉢がたくさん置いてあって、もうちょっとでジャングルでも、うっそうとしてるって言うより、暖かい緑に包まれているような感じがする。

しかも、カイの部屋にあった小さな植木鉢が、なぜか同じ感じがする。

ここからもられていった子なのかな。

「木が多くて邪魔かの。」

わしの奥さんが樹の精霊の守護の生まれでの。

死んでからどうも緑が近くにあった方が奥さんが近くにいるような気がしての。

つい置いてしまっくんじゃ。」

「いえ、とつても優しい感じがします。きっと奥様が近くにいらっしやるんですね。」

ヨール様は、ちょっとうれしそうに、少し照れたような顔をした。

だめだ、爺ちゃんがどんなにすごい人なんだとしても、

今、ここでかわいい以外の感想がない…。

「その奥さんじゃがの。」

一年ほど前に亡くなったのじゃが、死ぬ間際にわしに頼みごとを申しましての。

あるペンダントを預ってほしいというのじゃ。

それはわしと一緒にになる前から持っていたものでの、彼女の爺様からの預り物だと言って、

自分ではつけたことがなかった。」

ヨール様の奥様のおじいさんからの預り物って、ずいぶん長い間預っていることになるのかしら。

それにしてもそんな大切なものの話を、何で私に。って、まさか。

「察しはいいようじゃの。その感覚、大事になされよ。」

わしが初めて見たのは奥さんが結婚してうちに引越してきた時じゃ。

その時以外、見たこともなかった。

そんな大切にしまいこんでいたペンダントをわしに渡しながら、そのペンダントを渡す者が現れるまで、もしくは自分がそれを預れなくなることがわかるまで、

ペンダントのことは一切思い出さないだろう、と彼女は言った。「

それって、奥さんはもう自分では預かれなくてわかったってこと？
…切ない…。

でも、ヨール様は何事もないように続ける。

「その言葉どおり、今朝まですっかりペンダントのことは忘れておった。

今日はわしは休みでの。

家でお茶を淹れようと、お湯を沸かし始めたら、急に奥さんのこととペンダントのことを

思い出したんじゃ。

これは、渡すべき人が来たのじゃと思っただが、塔のイメージばかり現れる。

それで、塔に向かったんじゃが、近づくに連れ、お前さんの気配がしての。

ようやく全てが繋がった。というわけでの。」

ヨール様はよいしょ、と言いながら、器用に梯子を登り、

上の方の棚から大事そうに箱を取り出した。

それは深緑のビロードのような布張りの箱で、周りには銀の模様が付いている。

「これをお前さんに。もらってやってくれるかの。わしの奥さんからのプレゼントじゃ。」

そつと大切そうに箱を少しだけ撫でて、ヨール様は私にその箱を手渡してくれた。

私は、すでにちよつと泣いていた。

なんだか奥さんとのやり取りが切なくて。

「こんなに大切なもの、私がいただいていたいいんですか。」

「いいも何も、お前さんが塔を訪れる日に思い出したんじゃ。」

お前さんの他にこの塔にわしの知らないものはやってこない。

エミールとそのお付のものなんぞいつでも来ておるしの。

こつそり忍び込んだ神官共にも新顔はいないようじゃ。」

なんでそんなことまでわかるの？と聞きたかったけど、大賢者だからの、とか言われて

終わってしまったそうで、私には聞けなかった。

ついでに神官がこつそり忍び込むの？とか聞きたいし、

エミールさまへの大失敗とか思い出したけど、

いやいや、何より何より、こつち！

そつと箱を開けてみる。

中にはレモンのような鮮やかな黄色い石が付いた銀色のペンダントが入っている。

あまり飾り立てられているわけではないけれど、例えば賢者の白いローブにとても映えそうな

シンプルな作りだ。

何よりも。

「すぐく綺麗な石。これはなんとという石なんですか。」

「風の守護石でエオノーラというんじゃ。」

お前さんは風に加護を受けるものようじゃから、きつと力になつてくれる。

よかつたら、つけてみてくれんかの。」

「はい、ありがとうございます。すぐくつれしいです。
ところで、私が風に加護を受けているって、どうしてわかるんですか？」

話しながらそつと首にかけてみる。

なんだかあったかい感じがする。

にこにこうれしそうに笑ってくれるヨール様に、もう一度お礼を言おうとしたその時だった。

急に私はすごい風力で、上の方に引っ張りあげられる。
上？

これの上って何にもなかった気がするんだけど？
しかも天井は???

「ヨール様っ！これっ！」

おじいちゃんからぺんだんとをもらいました。

とてもきれいなしだったので、うきうきくびにかけました。そしたらうえにひっぱられました。

うーん、ひらがなでしか表せないこの呆然とした気分。

私が叫んだ声はヨール様に聞こえたのだろうか。

そもそも上って何なのよ。

普通のお部屋の上って言ったら、天井よ、天井。

でも、気が付くと私はヨール様の部屋ではなく、ましてやその天井に貼りついているでもなく、

光り輝く大きなドームの下の広い空間に浮いていた。

そう、空間に。浮いている。おいおい。

どうして浮いているのか、そんなことを考えていられないくらい驚くことに、

私の周りを取り巻く大きな六つの光がある。

赤、青、茶、黄色、紫、深緑。

それほど大きくはない。

バレーボールくらい、だろうか。

でも、それらは目に見える大きさよりも、もっと大きな存在であるように感じられた。

なぜだかわからないけれど。

どこからともなく、声が聞こえる。

(合格、じゃの。)

(まあ、以前の子はもう少し艶やかな感じでしたけれどね。この子

も磨けば光りそうね。)

(おやおや、見かけで決めてるわけじゃないでしょうね。)

(まあ、見かけも大事だけれど。心根は見かけに現れますからね。)

(戯言はいい加減に。いきなりこんなところに来てしまっただ驚いて
いるだろう。)

(そうですね、我が加護を受ける娘。そんな扱いは許しませんよ。)

全部の光がおしゃべりしてるみたい。

しかもよくよく聞くと私の品定め？

おいおい、勘弁してよ。意味わかんないですから！

のんきな話が延々と続きそうな雰囲気だったので、ダメもとでそつ
と声をかけてみることにした。

「あの…。」

すると、なんと反応があった。

(まあ、意外と度胸があるのね。話しかけてきましたよ、この状況
で。)

(何もわかっていないから意外と話しかけやすいのかもしれないぞ。)

(合格でしょうね。)

(合格、ですわね。)

合格？何に？

合格、って、なんなのよ、いったい。

(風の娘。我らも祝福を授けよう。)

(六つの力の祝福を。)

(七人目の大賢者として認めましょう。)

(千年ぶりの大賢者に心からの祝福を。)

(いかなるときも我らの祝福は共にある。)

(私の加護を受ける娘よ。全ての精霊の祝福をあなたに。)

六つの力の祝福？

七人目？

千年ぶり？

大賢者？

精霊？

えーっと・・・。

わけがわからない私がぼーっとしていると、突然目の前にやわらかい緑色の光が現れた。

【精霊様方、この子は何もわかっていないのです。面食らっていませんよ。】

やさしい声をする。

（おお、そなたは。）

（お前の加護を受ける娘なのか？）

【いいえ、私の加護など必要ないでしょう？

皆様の加護が祝福があるのですから。

だけど、もう少しだけ待ってやってくださいな。

この子が自らの道を決めるまで。

祝福は授けても、大賢者には今しばらくはなれますまい。】

淡い緑色の光の言葉に、大きくうなずくような雰囲気。

（そういわれれば、そうじゃの。）

（この娘には別の使命がありましたな。）

（ついうれしくなって呼んでしまった。お前の夫が心配しておろつ
の。）

（あれは性根の座った者だが、かわいそうなくらい他人に優しいか

らの。)

夫???

【我が夫の心配は無用ですが、その弟子の心配をしてやってくださいませ。

この子が心配でたまらないでしょう。

異変には気づいても、どうしてやることもできず、今は真っ青ですわ。】

弟子???

夫って、弟子って、この人はもしかして。

緑の光に話しかけたかったのに、六つの光が私に話しかける。

(違う、では還してやることにしよう。)

(だが娘よ、覚えておきなさい。)

(そなたは我らの祝福を受けた娘。)

(何かの折には思い出すのじゃ。)

(お前の力を蘇らせるきっかけになりましたよ。)

(落ち着いたらまた会いにくるがよい。いつでも待っておるぞ。)

「うっ。ちょっとよくわかりませんけれど…。覚えておきます。

ハイ。」

情けなくもそう答えると、光たちは何か満足したような雰囲気醸し出す。

突然引つ張り上げて、ちゃんと説明しようよー。

説明なしで還されるの、私?

戸惑う私に、緑の光が話しかけてくれる。

【さあ、お帰りなさい。あなたの世界に。
ちゃんと戻れば説明してもらえから、安心して、大丈夫。
そしていつか落ち着いたらまたここに来ることもあるでしょう。
その時は、もう少しいろいろなことがわかっていると思うわ。】
そう言われれば仕方がない。

「あ、あの、ありがとうございます。
私、なんだかよくわからなくてごめんなさい。
いつか、もつとわかったら、会いに来ます。
ええと、では、帰ります。
それと、あの、もしかしてあなたは。」

ふわっと、笑った。ほほ笑んだ。優しい笑顔の香りがする。

【愛している、とだけ伝えてちょうだい。

私の愛する夫と、その愛しい弟子に。

さようなら、絹花。

また、いつか会いましょうね。】

ちよっと笑いかけてくれたような声を聞いたのを最後に、来たときと同じように突風が吹いた。
ふと、目の端に銀色の光のようなものが現れたような気がして、
じっと見つめようとしたが、風が強すぎて目を開けていられない。
私は、目をぎゅっとつむった。

次に目が覚めると私は真っ青な顔をしたカイに抱きかかえられ、
ヨール様にじっと見つめられていた。

「絹花！俺がわかるか？」

わ、顔が近い！

「カイ。た、ただいま、なのかしら。」

ヨール様、私、いつたい？」

ヨール様がつこり笑って答えてくれる。

「もう大丈夫なようじゃの。」

お前さんはあのペンダントをつけた瞬間、ふっと意識を失っての。多分、この塔の最上階に行っておったのじゃろう。もちろん意識だけが、な。」

「え？じゃあ、体はここで倒れていたんですか。」

道理で宙に浮いてると思っただけです。」
意識だけか！。初めてだわーこんなこと。」

「絹花、お前。…意外と冷静なのだな。」

青い顔によやくほっとした表情を見せて、カイがつぶやく。
いや、だって、全部一瞬の夢のようであまり現実感がないって言うか。

あ、いや、伝えなくちゃ！

「あ、ヨール様、カイ。」

あの、ヨール様の奥様に助けていただいたんだと思います。
どうも精霊様方が祝福してくださったみたいなんですけど、
私、よくわからなくてびっくりしていたら、そつとやってきてく
ださって。

それで、あの、伝言を。」

ヨール様が目を細める。

「あれは、何か言っていたかの。」

「愛しているとだけ伝えてくださいって。愛する夫と、愛しい弟子に。」

「マーサ様……」

カイがつぶやく。

「マーサ様っていうのね？」

私、名前も伺えなかった。

いつか、またお目にかかることができたら、そう呼びするわ。

あの、ヨール様、とっても優しい淡い緑の光で。」

「そうか。マーサがお前のお役に立ちましたかの。

それがあれの運命だったのかもしれないの。

いずれにしろよかった。」

ほんのちよっとだけヨール様の目に涙が光ったような気もするけれど、

見なかったことにしなくちゃ、ね。

「ところでの、絹花。

六人の精霊の祝福を受けたとき、お前さん、大賢者と言われなかったか？」

へ？

「あ、そういうえば、そんなこと言ってましたよ。

七人目だとか千年ぶりとか言われたような気がします。」

「ふむ、やっぱりの。」

お前さん、この先どうするつもりかわからんがの。

もしも全てを明らかにすることができて、このままこの世界に留まるなら、

よかつたら賢者の塔においで。

お前はさつき、七人目の大賢者として世界の精霊全てから認められたんじゃ。

とは言え賢者のことは何も知らんだろう？

わしが弟子としてこきつかってやるでの。

安心してくるがいい。」

ようやくヨール様の部屋の長椅子に座ってお茶をもらって落ち着いたら、と思つたら、

ヨール様はとんでもないことを言い出した。

え、あれってそういうことだったの？

「師匠、絹花が、七人目の大賢者だつていんですか？」

カイも驚いたようにヨール様に詰め寄る。

ヨール様の答えは、単純明快。

「六人の精霊から祝福を受けるものが七人目の大賢者だというなら、文字通りじゃろう？」

うーん。

「私が、大賢者ですか？」

だから奥様、何も知らないからもうちょっと待ってやってくれって言つてくださつたんでしょか。」

精霊様方、いきなり何も知らない私に、手に職つけられても困りますつてば。

しかもそんな大それた職業！

「いきなり大賢者、と言われても、お前さんも困るじゃろう？」

まあ、気が向いたら、でええでな。」

ヨール様は、いたってのんきに答える。

「はあ。」

確かに、この世界のこと、まだまだ知らないことだらけなのに、いきなり職業決められても困るって言うか、そもそもこの世界にずっといるかどうかもわからないし。

今頃になってぐるぐると迷いだした私を見かねて、カイはヨール様に挨拶をすると、

私を引きずるように部屋から退出させ、そのままずんずん歩いていく。

「カイ、ちょっと、どこに行くのよ？」

「今日はもう終わりだ。」

どのみちそんな頭で何を話したところで、覚えられないだろう？」

確かに、さっきは無我夢中になっていたけど、冷静に考えると、私が大賢者になったとして、何をしたいのか全くわからないぞ？修行するのかな？

でも、何の？どんな？

修行って言うと座禅とか雑巾がけとか何でそんなイメージしか出てこないんだろう。

もっとこう、ファンタジーで修業って…？

うーん…。

再びぐるぐると考え出した私の顔を見て、今日何度目かのため息をつくと、

カイはそのまま引きずるように私を城まで連れて行ってくれたのだった。

七人目の大賢者 03 (後書き)

精霊様方は久々に大物(?)登場で、ウキウキです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4208w/>

銀の鷹

2011年11月17日21時49分発行